

嫉妬・羨望と自己評価の維持
——嫉妬と羨望の心理学(4)——

中 里 浩 明

Summary

Examining a Self-Evaluation Maintenance Model of Jealousy/Envy

Hiroaki Nakazato

It is hypothesized that the feelings of jealousy and envy are associated keenly with those of self-relevance, i. e., the importance of domains valued in life, the discrepancy of one's own actual and ideal performance, and low self-esteem. Research findings demonstrate the usefulness of such self-evaluation maintenance theory.

1. 自己評価維持モデル

嫉妬や羨望という感情が、自己定義や自己概念と密接に関係していることは、これまでも論述と調査研究で縷々説明してきたごとくである(中里, 1991, 1992a, 1992b)。自分が大事に抱懐してきた貴重なものが、他者に篡奪されるかもしれないという危惧や惑乱を指して嫉妬と呼ばれるし、到底及び得ない財貨や属性を持つ近くの他者に対して抱かれる心情を指して羨望と称される。もちろん、両者が分かちがたく結合している場合も多々存在する。これらの、いずれにおいても、＜自己＞が離れようもなく深く関与している。

その故、改めて述べる必要もないくらいではあるが、ここで、焦点を狭く限定し、自己に纏わる嫉妬と羨望の経験的な研究を提示していくことは、十分の意味があると思われる。別言すれば、嫉妬・羨望の自己評価維持モデルを検討していこうとするのである。それには、まず、自己評価維持モデルそのものを概観しておかなければならないであろう。

さて、個人は正確な自己評価を獲得しようとして、自分の意見や能力の類似した他者と比較しようとするとき指摘し、これを、社会的比較過程の理論と名づけたのは、かのFestinger (1954)であった。正確な自己評価は、周りの環境に適切に反応していくために不可欠であり、認知的明瞭さを得んとする動きが、そこから流れ来るとされる。爾来、比較の対象としての類似の他者の由縁、上方比較や下方比較など、様々な課題が脈々と探究され続けている。

そうした経過の中で、社会的比較には、当初想定されていた自己の認知的評価への欲求のみならず、自らを高めたい、それらしく維持したい、という自己高揚の欲求も働くことが知られてきた。この点、即ち、個人が、いかにして自己評価(self-evaluation)を維持したり高揚させたりするか、ということを精力的に扱っているのが、最近盛んな、自己評価維持モデルである(e.g., Tesser, 1991; 概説には、磯崎, 1989; 高田, 1992; 山口, 1990; なお、中里, 1992b 参照)。

このモデルの基本的仮定は、人は、肯定的な自己評価を維持しようと動機づけられているというものである。肯定的な自己評価を維持するために、自己の評価が低下しそうな状況は鋭意回避されるし、逆に、自己評価を上昇させてくれそうな情報は積極的に獲得しようと図られる。ここでいう自己評価と性格次元としての自尊心(self-esteem)との相違は、後者が一般的で、比較的安定していると考えられているのに対して、前者、自己評価は、自他の関係や他者の振る舞いによって一層影響を蒙りやすいとされている点である。こう、一応区別される。

自己評価を上昇させてくれるのは、心理的に近い他者が優れた業績をあげ、しかも、その領域が自分の自己定義とは関連の低い場合である。この場合、他者の秀でた成果の光栄に浴することになる。これを、反映過程(reflection process)という。しかし、関連の程度が高いと、なかなか落ち落ちてはいられない。自己定義に脅威を感じられ、比較過程(comparison process)が生起し、自己評価は引き下げられてしまう。自己定義との関連性・関与度(relevance)が、2つの過程を左右するのである。

かくして、自己評価の維持に関わる要因には、他者の心理的な近さ、特定領域での自己と他者の遂行（業績）、当該領域の関連性の程度、があげられる。これら3要因のいろいろな組み合わせに応じて、嫉妬や羨望といった感情も様々に変転し浮沈を遂げることであろう。

2. 嫉妬・羨望の価値領域の関連性

久しき以前、筆者（大前・中里，1977）は、自分が満足し関連があると思われる領域で他者を判断しがちな傾向のあることを指摘した。この事情は、別のところでの確に指摘されている（Lewicki, 1983）。即ち、対人知覚における中心的な次元の個人差は、知覚者の自己像に関連を持っている。個人は、望ましい自己評定を下している次元を、他者を知覚する場合でも中心的な次元としているのである。いずれの場合も、性格の次元に関するものであったが、なにも、それに限定するには当たらない。態度や価値などの次元にも、充分、適用可能な事柄である。

Salovey & Rodin (1991) は、既に検討していた課題、つまり、嫉妬と羨望という感情は、個人ごとの生活（価値）領域の重要性、或る領域での現実の遂行と理想水準との不一致、低い自尊心、それらと確実に結びついていることを明らかにしようとした。その発見結果は、これらの仮説を相当の割合で裏書きしていたのである。

そこで、筆者は、彼らの研究に沿う形で、独自の資料を用いて、嫉妬・羨望と自己評価の維持機制を検討していくことにした。さしづめ、個人は各々にとって貴重な価値領域に属する物事を一層意義深いと見なし、自尊心や自己評価を包絡させていることであろうし、ひいては、当該領域への侵害、損傷に対しては、嫉妬や羨望の感情も倍増喚起されることであろう。これらが、仮説と言える。

3. 研究 I

目的

嫉妬・羨望の感情と価値領域の重要性 (importance) の程度、一般的な自尊心や自己評価の絡みぐあいを解きほぐすことが、このリサーチの狙いである。

方法

被験者

神戸女学院大学の専門課程に属する学生の参加を得て、これを3組に分けて、集団でリサーチを実施した（1992年5月）。記入の不備な調査票は削除し、分析に使用したのは52部であった。平均年齢は、20.42歳（SD=0.75）。

刺激材料

以前に、嫉妬と羨望に関する状況や出来事を自由に記入してもらった文章を、『感情挿話』という標題の下に分類した（中里，1992a参照）。内容分析の結果、次の5つの価値領域に集約するのが有効であると考えられた。

- a. <財産> …物質的に恵まれ、質の高い生活を送ること。
- b. <人気> …性格がよく、まわりの人々から好かれること。

- c. <業績> …能力があり、抜群の成績をあげること。
- d. <容姿> …容貌やスタイルに優れ、魅力的であること。
- e. <恋愛> …素敵な異性と出会い、恋におちること。

これら総計456の感情挿話の記述項目から、それぞれの価値領域を代表する項目を5つずつ選択し、嫉妬と羨望の刺激材料とした（付録資料参照）。

手続き

「このリサーチは、対人感情の基礎的な研究に関するものです。頁の順に、設問に対して、皆さんの思ったままをお書き下さい。」と教示し、匿名で、性別と年齢の記入だけを求めた。提示順序は、次の通りである。

<価値領域の重要性評定>

「以下の5つの項目それぞれは、あなたにとって、どのくらい重要ですか。」と尋ね、上述の、財産、人気、業績、容姿、恋愛の価値領域を、「非常に重要だ」から「まったく重要でない」まで、5から0までの6段階に評定してもらった（得点づけは、6-1、以下同じ）。「次に、順位をつけるとすれば、どうなりますか。」と尋ね、1位から5位までの判定を求めた。

<現実/理想自己の評定>

先の評定と類似のフォーマットを用い、「同じく、以下に、5つの項目があげられています。それぞれの項目は、あなたにとって、現実に、どのくらい満たされていますか。また、理想の水準はどのあたりですか。」と尋ね、「非常に満たされている」から「まったく満たされていない」まで、6段階に評定してもらった。

<自尊心の評定>

Rosenberg (1979) の自尊心尺度 (Self-Esteem Scale) の翻訳版を使用した。『私はすべての点で自分に満足している。』、『私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。』など、10項目を提示し、「以下に、自分についての気持ちが述べられています。あなたは、その通りだと思いますか、そうは思わないですか。」と尋ね、「その通りだと思う」から「そうは思わない」まで、6段階に評定してもらった。

<嫉妬・羨望の評定>

付録資料のごとき短文を、価値領域ごとに5つずつ、計25に予備項目を1つ加え、全部で26ばかり作成し、順繰りに配列した。これら短文の基礎となったのは、上述したごとく、『感情挿話』の資料である。その意味で、いずれも、被験者に身近な話題だと思われる。なお、刺激人物に、友達、級友、知人などと適宜に付したが、価値領域間の心理的な「近さ」(closeness)を一定に保つように配慮した。

そして、「以下に、幾つかの状況が記述されています。それぞれの状況に置かれたとき、あなたは、嫉妬や羨望をどのくらい感じますか。」と尋ねた。例えば、『親が、自分以外のきょうだいを特にかわいがっている』が、刺激の文であり、これを、「嫉妬や羨望を非常に感じる」から、「かなり、少し感じる」、「あまり、ほとんど感じない」を経て、「まったく感じない」までの6段階に評定してもらった。

結果と考察

＜価値領域の重要性評定×嫉妬・羨望＞

被験者には、財産、人気、業績、容姿、恋愛の価値領域の重要性の程度を記入してもらっていた。その重要度の粗点に、1-5位までの順位づけ得点を、5-1点に変換したものを、重みづけとして加算し、評定点とした。この措置は、価値領域の重要性を可能な限り明細化したいがためにほかならない。

次に、嫉妬・羨望を喚起すると思われる26項目の内容分析を実施した。即ち、価値領域ごとに、項目得点と総点を相関させた。すると、26項目中、1項目だけが、 $r = .50$ 以下の相関係数を示すのみであった。

また、正確を期するために、全項目反応の得点を因子分析にかけた。第1因子への寄与率は30.26%であり、ここに、18/26項目が最も著しく負荷していた。以下は、固有値が急激に減少し、第6の因子で固有値1を下回っていた。しかも、累積寄与率を調べると、殆ど5因子で説明し尽くされているようであった。従って、第1因子に強く負荷しなかった残りの8項目は、手を加える余地があると考えられるが、現行でも、程々の信頼性ある尺度だと見なすことができよう。

このように、項目を吟味したうえで、予測を検討することにした。即ち、価値領域への関連性の程度と嫉妬・羨望の感情との間には、密接な関係があるというのが、そもそもの仮説であった。そこで、重要性の評点と嫉妬・羨望の価値領域ごとの総点との相互相関を算出することにした。結果は、表1に掲げる。

見られるごとく、両者の相関係数は控え目である。ゴシックで強調した数値が、仮説に関係するところだが、さほど高い値とは言えない。中では、恋愛領域での重要性和嫉妬・羨望の関係する係数が最も著しい($r = .29$)。同じく、業績の領域も傾向が顕著であり($r = .28$)、人気の領域がこれに続いている($r = .20$)。あとの、容姿と財産の領域は無相関とも言え($r = .03$; $-.13$)、判然とした結果が出ているとは到底考えられない。それでも、財産の領域を除けば、列間比較をすると、最高の値である。こうした今ひとつ判然としない結果は、仮説に由来するというよりも、質問紙に原因を求めるほうが、一層適切であろう。なぜなら、有意な相関係数が出ている領域もあり、また、価値領域の定義や項目設定が必ずしも至当だとは言いがたい点も散見されるからである。

表1. 嫉妬・羨望と価値領域の重要性との相関

嫉妬・羨望	財産	人気	業績	容姿	恋愛
領域重要性					
財産	-.13	-.31	-.08	-.19	-.03
人気	.02	.20	.07	.02	-.02
業績	.07	.12	.28	.16	-.28
容姿	-.03	-.19	-.10	.03	.08
恋愛	.09	.00	-.01	.17	.29

<現実/理想自己の差×嫉妬・羨望>

データを得点づけにしたのち、理想自己から現実自己の得点差を算出した。この差の得点が分析には関係してくる。差が大きければ、それだけ、価値領域別の自己評価は低いと想定される。

そこで、現実自己と理想自己の得点差が、嫉妬・羨望の反応にどのような効果をもたらすかについて検討した。結果は、総じて相関係数は低く、両者間に顕著な相違を見出すことはできなかった。価値領域に関しても、恋愛を除き、目立った傾向は身受けられない（財産 $r=.08$ ；人気 $r=-.01$ ；業績 $r=.10$ ；容姿 $r=.05$ ；恋愛 $r=.28$ ）。恋愛の領域における数値の相対的な高さに関して、明確な指摘を下すのは、いささか憚られるところである。しかし、現実の様態と理想の水準の落差が、当該領域での嫉妬・羨望の感情に、なんらかの効果を与えているのであろうとは推察できる。それ故、自己評価を維持しようとして、嫉妬や羨望といった感情が頻繁に喚起されるという事情を頭に描くことは、比較的容易に可能である。

<自尊心×嫉妬・羨望>

一般的自尊心のデータを得点づけしたのち、項目得点と総点の相関係数を算出し、項目の洗い出しを実施した。すると、 $r=.44$ の項目を除けば、.55以上のかかなり高い数値の項目が並んでいた。また、因子分析にかけたところ、第1因子に.55以下の負荷量を示す項目が2つあり（先程の、最低値の項目を含む）、これらを削れば、尺度には相当の整合性が認められると判断された。それ故に、2種類の判定基準に基づいて2項目を排除し、一般的な自尊心の指標としては、残りの8項目の得点を使用することにした。

個人ごとに、修正自尊心尺度の総点を算出し、これらを、嫉妬・羨望の各価値領域の得点と相関させた。すると、財産との間では $-.23$ 、容姿との間では $-.27$ の有意な相当の負の相関が見出された。しかし、人気や業績や恋愛の領域では、予測どおりの結果が認められたとはいえない（それぞれ、 $r=-.11$ ； $-.10$ ； $.06$ ）。思うに、一般的な自尊心の低さは、嫉妬・羨望に関係があるとしても、その間には、様々な要因が介在していることであろう。従って、この事項に関して、今の段階では、結果は予測の方向にあると述べるに止めたい。引き続き検討を加える必要がある。

4. 研究Ⅱ

目的

価値領域の関連性評定、自己の評価、嫉妬・羨望の関係を一層闡明にするために、焦点を絞って、調査票の修正すべき箇所を修正し、再度検討することを目的とする。

方法

被験者

神戸女学院大学の基礎課程に属する学生の参加を得て、集団でリサーチを実施した（1992年6月）。記入の不備な調査票は削除し、20部を分析に使用した。平均年齢は、18.50歳（SD=0.76）。

刺激材料

表現形式は研究Ⅰと同じである。ただし、価値領域のうち、＜財産＞を、「物質的に恵まれ、ゆとりのある暮らしをすること」に修正した。5つの価値の領域を代表する項目を6つずつ作成し、もって、嫉妬と羨望の刺激材料とした。つまり、4つ追加し、短文にも手を入れたわけである。こうして、上述の因子分析の結果、第1因子に強く負荷しなかった項目は、全てなんらかの修正を施したのである（付録資料参照）。

手続き

「このリサーチは、対人感情の基礎的な研究に関するものです。設問に対して、皆さんの思ったままをお書き下さい。」と教示し、匿名で、性別と年齢の記入だけを求めた。提示順序は、次の通りである。

＜価値領域の関連性評定＞

「以下の5つの項目それぞれは、あなたにとって、どのくらい重要ですか。」と尋ね、上述の、財産、人気、業績、容姿、恋愛の価値領域を、「非常に重要だ」から「まったく重要でない」まで7から1までの7段階に評定してもらった。しかも、「順位をつけるとすれば、どうなりますか。」とも尋ね、1位から5位までの判定を求めた。

また、研究Ⅰで、価値領域ごとに項目得点と総点を相関させていたが、高位の相関係数を示した項目を2つずつ抜き出し、関与の程度の評定に供用することにした。「以下の状況は、あなたに、どのくらい関わりがあり、心を揺さぶられますか。」と尋ね、関与の程度を、「非常に関わりがある」から「まったく関わりがない」まで、7から1までの7段階に評定してもらったのである。

＜現実/理想自己の差の評定＞

価値領域ごとの現実の様態と理想の水準の差は、具体的な形容語で表示することにした。「以下に、項目が5つあげられています。それぞれの項目に関して、あなたの現実と理想の間には、どのくらいの差がありますか。」と教示し、「はなはだしい差がある」から「まったく差がない」まで、7から1までの7段階に評定してもらったのである。

＜嫉妬・羨望の評定＞

「以下に、幾つかの状況が記述されています。それぞれの状況に置かれたとき、あなたは、嫉妬や羨望をどのくらい感じますか。適当な数字に○をつけて下さい。」と記し、「嫉妬や羨望を非常に感じる」から「まったく感じない」まで、7から1までの7段階に、個々の項目を評定してもらった。なお、項目は、価値領域順に系統的に配列し提示した。

結果と考察

＜価値領域の関連性×嫉妬・羨望＞

領域の重要性和関与の程度を評定してもらっていたが、この数値を合算して、各々の価値領域への関連性(relevance)の指標として使用することにした。即ち、財産、人気、業績、容姿、恋愛の価値領域の重要性の程度の評定点に、順位づけ得点(5-1点に変換)を重みづけとして加算した。また、関与の程度には2項目用意していたが、その得点を平均化した。これら2種

類の得点を合算し、関連性の指標としたのである（得点範囲は19から3点まで）。

まず、嫉妬・羨望を喚起すると思われる30項目の内容分析を実施した。価値領域ごとに項目得点と総点を相関させたのである。すると、全項目中、 $r = .50$ 以下の相関係数を示す項目が5つ認められた。これらは、概ね、価値領域ごとに拡散していた。そこで、各領域から1項目ずつ削除することにし、5領域5項目、合計25項目を分析に充てることとした（付録資料の#印参照）。修正した尺度は、信頼性が相当に深まった尺度だと受け止めることができよう。

このように項目を吟味したうえで、予測を検討することにした。即ち、仮説は、価値領域の関連性と嫉妬・羨望の感情との間には、緊密な関係があるというものであった。その関係を明らかにするために、ここでもやはり、両者の相関係数を算出することにした。結果は、表2に掲げる。

見られるごとく、今度は、研究Iの結果よりも、はっきりした傾向が出ている。ゴシックで強調した仮説に関連する相関係数は、いずれの価値領域においても、相対的に高い数値となっており（ $p < .05$ ）、列間比較でも、そのことは当てはまる。殊に、業績領域での関連性と嫉妬・羨望の関係する係数は最も著しい（ $r = .80$ ）。同じく、容姿や恋愛や人気の領域も傾向が顕著であり（ $r = .69, .68, .66$ ）、最低の財産の領域でも相当高い値である（ $r = .52$ ）。研究Iとの直接的な比較は、被験者数の違いにより、一概にできるものではない。とはいえ、にも拘らず、価値領域への関連性の程度と嫉妬・羨望の感情との間に、期待どおりの傾向が相当鮮明に出現したことだけは確かである。

表2. 嫉妬・羨望と価値領域の関連性との相関

嫉妬・羨望	財産	人気	業績	容姿	恋愛
<u>領域関連性</u>					
財産	.52	-.14	-.15	-.21	-.04
人気	.28	.66	.55	.13	-.20
業績	-.23	.23	.80	.03	-.08
容姿	.15	.08	-.01	.69	.23
恋愛	.22	-.04	-.22	-.07	.68

<現実/理想自己の差×嫉妬・羨望>

現実自己と理想自己の相違の認知という形式での自己評価を、今度は、被験者に直接的に尋ねることにした。得点差が大きいほど、嫉妬・羨望と関係が深いと想定される。しかし、結果は思わしくなく、仮説に関連する相関係数が、他と比して、一歩前方に突出しているは見なすことは甚だ困難である（財産 $r = .51$ ；人気 $r = .17$ ；業績 $r = .07$ ；容姿 $r = -.22$ ；恋愛 $r = -.23$ ）。確かに、現実の様態と理想の水準の落差が、当該領域での嫉妬・羨望の感情に、なんらかの効果を与えているであろうはずではある。自己評価を維持しようとして、嫉妬や羨望といった感情がしきりに喚起される事情を、この窓を通して、垣間見ることが可能であると言いたいところであるが、相当の躊躇がつきまとう。当該指標に関しては、仮説の方向に有意な傾向が認められるとは主張しがたい。しかし、逆に認められないとも断言できない。被験者数を増やし、

追跡的なリサーチが必要であろう。

こうした結果が生じた背景には、設定した5つの価値領域の全てがすべて、だれにとっても、ほぼ等しく重要であり、相互に深甚な選好の差異を認めにくいという事情が伏在しているように思われる。また、現実の様態と理想の水準の落差をもって自己評価の指標としたのであるが、この指標の取り方に今一層の工夫を凝らさなくてはなるまい。

しかしながら、相関係数を拠り所として、価値領域の関連性—自己評価—嫉妬・羨望の結びつきを濃密に描き出そうという試みは、そもそも、ここに見出されたような、比較的に控え目な傾向しか浮かび上がらせないものなのかもしれない。されど、両者の間に有意な関係が厳然と存在することは事実であり、この点は強調されてしかるべきであろう。

5. 結語と今後の課題

様々な価値領域の重要性や関与の程度と嫉妬・羨望の感情との間には、相当の関係が認められる。即ち、関連性が低ければ嫉妬・羨望はさほど喚起されないが、高ければ高いほど、嫉妬・羨望の感情はいやまし、諸条件が整えば、激烈に開発されることであろう。

また、特定の価値領域に関して、現実の様態と理想の水準の落差が、当該領域での嫉妬・羨望の感情に何程か効果を与えているであろうと推察できる。その故、自己評価を維持しようとして、嫉妬や羨望といった感情が頻繁に激烈に喚起されるという事態が生起することであろう。

さらには、一般的な自尊心のありようも、嫉妬・羨望の生起や出方に関係を持っているようである。充分明確な証跡は見出し得なかったけれども、それらしき徴候は窺い知れた。この点は、嫉妬や羨望の個人差と絡めて、今後とも考察されなくてはならない事柄である。

その他には、課題は山積みしている。理論的な考究も猶更必要であるし、様々な次元での嫉妬や羨望の経験的研究にも手を染めなくてはならない。多方面からのアプローチが必要とされよう。

畢竟、嫉妬や羨望を喚起するような否定的な出来事への遭遇は、日常茶飯であると言える。だが、これらによって惑乱される以前に、いわば、大過なきうちに、我々は、なんらかの手段を講じて収拾しているであろう。その手段の主たるものはなにか、どういう脈絡でどういう方策が打たれるのか、この種の問題が扱われなければならない。従って、次の課題は、嫉妬・羨望の対処方略を、一般的に、また、それぞれの価値の領域と関連づけて、仔細に検討することである。

引用文献

- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
磯崎三喜年 (1989). 社会的比較と公平 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編)社会心理学パースペクティブ1: 個人から他者へ 誠信書房 pp. 184-206.
Lewicki, P. (1983). Self-image bias in person perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 384-393.

- 中里浩明 (1991). 嫉妬と羨望: W. G. Parrottの類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)— 神戸女学院大学論集 38-2, pp. 51-66.
- 中里浩明 (1992a). 嫉妬と羨望の意味構造—嫉妬と羨望の心理学(2)— 神戸女学院大学論集 38-3, pp. 129-134.
- 中里浩明 (1992b). 嫉妬・羨望と社会的比較の過程—嫉妬と羨望の心理学(3)— 神戸女学院大学論集 39-1, pp. 115-130.
- 大前 衛・中里浩明 (1977). 人格特性次元の関連性・満足性と他者選択 湊川女子短期大学紀要 12, pp. 35-40.
- Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1991). Provoking jealousy and envy: Domain relevance and self-esteem threat. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 10, 395-413.
- 高田利武 (1992). 他者と比べる自分 サイエンス社.
- Tesser, A. (1991). Emotion in social comparison and reflection processes. In J. Suls & T. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research* (pp. 115-145). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 山口 勸 (1990). 「自己の姿への評価」の段階 中村陽吉(編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp. 111-142.

付録資料

《価値領域ごとの嫉妬・羨望の刺激項目》

…研究Ⅱで, [] は修正, < > 追加した語句。#印は分析に残した項目。

- a. <財産> …物質的に恵まれ, 質の高い生活を送ること。〔ゆとりのある暮らしをすること。〕
 #隣家の知人が, 宝くじで 100 万円もうけたという話をする。〔知人が, 行ってきたばかりの豪華な海外旅行の話をする。〕
 #仲のよい同級生が, 就職で, 強力なコネを持っているのを知る。
 #以前から, 手に入れたと思っていても, 経済的理由などから入手できないでいたものを, 友達が身につけている。
 #友人は, 金持ちの家に生まれたばかりに, いつも優雅な暮らしをしている。
 *自分だけ〔自分〕の世界を持っていて, それに打ち込んでいる級友がいる。
 <#イギリス留学から帰ったばかりの, 自分とは, 住んできた世界の明らかに違う同輩がそばにいる。>
- b. <人気> …性格がよく, まわりの人々から好かれること。
 #親友が自分との約束を忘れ, 他の人に誘われて旅行に出かけてしまう。〔友達たちが, 自分に声をかけずに, ディスコに出かけてしまう。〕
 *クラブに新しく入ってきた人物〔女の子〕に, 自分の人気を奪われる。
 #友人は, 話上手で, 周囲の人を引きつける魅力がある。
 #同じことをしても, 自分は上の人にほめられず〔自分はみんなに認められず〕, 同僚はほめられる。
 #知人が, 自分にはない優れた性格を持っているのを発見する。
 #親が, 自分以外のきょうだいを特にかわいがっている。
- c. <業績> …能力があり, 抜群の成績を上げること。
 #クラス会で久しぶりに出会った, 成績の同程度の級友が, 自分の入りたかった, 偏差値の高い大学に通っている。
 #身近に, 何事でも, 要領よくこなしてしまう知人がある。
 #自分よりも, 友達のほうが, 勉強やスポーツなどの能力がある。
 #能力の劣ると思っていた同級生が, テストで, 自分より良い点を取る。

#自分が、かねてからつきたい、つけるだろうと思っていた役職を、同僚に取られる〔横から取られる〕。

〈*自分がやりたいと思っていたことで、友人に先を越されてしまう。〉

d. <容姿> …容貌やスタイルに優れ、魅力的であること。

#友達は、生まれつき美しい容姿を持っていて、いくら努力しても叶わない。

#ゼミの同輩は、健康で明るく、いきいきしている。

#級友は、スタイルがよく、ファッションがすごく決〔き〕まっている。

#クラブの知人は、性格は悪いのに、美人というだけで、ひとにちやはやされている。

#同じような服を着ても、友人のほうが似合っている。

〈*同級生が、やせたと言って、はしゃいでいる。〉

e. <恋愛> …素敵な異性と出会い、恋におちること。

#以前に交際していた相手が、自分より、魅力的な人とデートしているのを目撃する。

#恋人または好意を抱いている人〔恋人〕が、別の異性〔自分以外の女性〕と親しくしている。

#彼氏の部屋の電話に、女の声で、名前付きの〔親しげな〕留守電が入っている。

#友達から、素敵で、仲の良い彼氏の話聞かされる。

*好感〔好意〕を抱いている人が、自分のきれいなタイプの女の子と、目の前で仲良くしている。

〈#友人のほうが、かっこいい男性とつきあっている。〉

(原稿受理 1992年6月22日)